

# てんかんき 人生の転換期

めいじ おつとかんしち せっかい  
明治42年(1909) 夫勘七は、57才で石灰の山を息子に  
ゆず いんきよ  
譲り、隠居(※13)することとなりました。

しかし、まだ40才にもなっていなかったナヲは隠居生  
活に満足することができませんでした。

その頃、蓼沼本家では、将来性のある一族の者20人く  
らいに育英資金(※14)を出して学校に行かせていたのです。

それで、ナヲは上野の美術学校(※15)が女子を入学させ  
るという話を聞き、行かせてもらいたいと頼みましたが  
「もう40才になるし、子どももいる。女に学問はいらな  
い」と言われ、泣く泣くあきらめました。

## ※13 隠居

第一線から退くこと

## ※14 育英資金

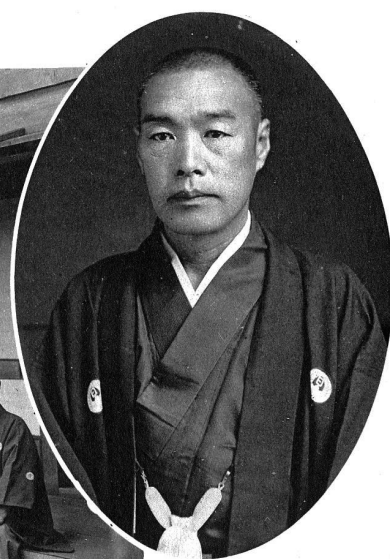
主に経済的な理由により進学ができない人に出す奨学金

## ※15 上野の美術大学

東京芸術学校。現在の東京芸術大学の前身

しかし、まだ<sup>いんきよ</sup>隠居などしたくないと考えたナヲは兄と弟  
のいる留萌で思い切り絵を描きたいと思い、子どもたちを  
連れて<sup>さの</sup>佐野をあとにしました。

子どもたちを連れて<sup>つ</sup>汽車の旅は大変なものでしたが、列  
車の<sup>かた</sup>堅い<sup>ざせき</sup>座席にゆられながら、これから向かう留萌の町を  
<sup>そうぞう</sup>想像するナヲ一家でした。



ナヲの兄 <sup>くさかべかずえ</sup> 日下部主計